

令和7年度 学校関係者評価書

鈴鹿市立桜島小学校				
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上×ICT活用	こどもたち自身が思いや疑問をもち、問題や課題づくりを進め、それを実現・解決していける授業をめざす。 →全国学力学習状況調査・みえスタディ・チェックで平均より2ポイント上 →児童アンケート「学校の勉強は楽しい」90%以上 →児童アンケート「ICT活用の授業はわかりやすい」90%以上	▲4年生のみえスタディ・チェックのポイントは、県の平均と比べ、国語：-0.2ポイント、算数：+3.2ポイントであり、両教科共に2ポイント上を達することができなかった。 ○5年生のみえスタディ・チェック（1回目）のポイントは、県の平均と比べ、国語：+6.3ポイント、算数：+2.1ポイントであった。5年生は2回目の調査がある。1月21日に実施された。 ▲全国学力学習状況調査（6年生）のポイントは国の平均と比べ、国語：+1.2ポイント、算数：+1ポイントであり、両教科とも2ポイント上を達することができなかった。 ▲児童アンケート「学校の勉強は楽しい」の項目で、肯定的な回答は89％（7月）→88％（12月）であり、90％を達することはできなかった。7月と比べ、12月の肯定的回答率が低下したのが、3・4・6年であった。中学年低下の要因として、具体的で体験的だった多くの学習が、中学年になり、抽象化するため、学習がつまずきやすくなったこと、直観だけでは解けない問題や積み上げが必要な単元が増え、一度つまずくと「わからない→楽しい」の悪循環に陥りやすいことが考えられる。6年も、社会（歴史）や算数など、中学校に繋がる難解な単元が続き、苦手意識が固定化しやすい。また、12月は卒業・進学が強く意識する時期であり「勉強についていけるか」という不安が「楽しさ」を阻害している可能性があると考える。 ○児童アンケート「ICT活用の授業はわかりやすい」の項目で、肯定的な回答は93％（7月）→92％（12月）であり、目標の数値を達成することができた。学年別で見ると、高学年の肯定的な回答率が7月に比べ、12月の数値がわずかに上昇した。デジタル教科書や動画教材を使って、言葉や挿絵だけでは理解しにくい内容を視覚的に捉えることができることや、ドリルパーク（AIドリル）の学習では、即時に正解・不正解がわかり、間違えてもすぐにやり直せ、つまずきをその場で解消しやすいこと、そして、調べ学習やプレゼン作成など、ICTを使用して自分の考えを表現学習が、受動的な学習ではなく、自分で組み立てる学習が「わかりやすい授業（楽しい授業）」につながったと考える。	・5年生になってから、ICT授業でつまずき、不安と焦りを感じた時、先生や友人に相談できないと感じ、毎日不安な気持ちで授業参加している時間が続く。先生や友人に相談しにくくなっているのではないかと。と思います。常に生徒に声かけして、生徒の不安要素を見つけてほしい。 ・昔に比べて、算数の問題が計算を解くだけでなく、文章を読解する力が多く必要に感じました。5年生は国語が平均の+6.3ポイントだから算数も+2.1ポイントと、目標を達成できたようにみられます。 ・いくら計算が得意でも文章問題を理解できなければ、問題は解けないので、国語にもう少し力をいれていけば、もしかすると6年生も4年生も+2ポイントを上回ることでできたかもしれないと感じました。 ・chromebookを使用しての学習は、親からみても楽しんでいるように感じます。ただ、宿題をしているのか、他のことをしているのか、判別がつきづらいのが困ります。また、宿題をきちんとしているのかも確認しにくい点が改善されると嬉しいです。 ・「学校の勉強は楽しい」について。「授業が楽しい」ことが「勉強は楽しい」につながるので、楽しい授業が大切であると思います。 ・中学年以降になると学習内容が難しくなるために「勉強は楽しい」と思える児童が増えてるように思います。 ・ICT活用で、振り返り学習ができているようなので、ICTを利用して苦手な分野の学習のフォローができればいいなと思いました。 ・学校の勉強が楽しいと感じる児童が多いのは、大変喜ばしいことで、日頃の先生方の工夫や努力が実を結んだことの表れだと思います。 ・ICT活用については、最近のAIアシスタント技術の変化を考えると、様々なことへの応用が可能で、かつ日々進化しているため、好奇心を刺激し易いが、価値の消失も早いと思われます。常に新しいことを意識しつつ、学校生活や学習へとり入れることそのものが、子どもたちのICT活用の能力を育むことになる。一方で、過去の手法や技術を上手に捨て去る方法も学ぶことができればと思う。 ・最近の授業では、先生から教えて頂くだけでなく、子ども同士で話し合って解答方法を導き出す授業もあると聞きました。自分の意見や考えをまとめるのに時間がかかる子や人に伝えるのが苦手な子は大変だと思うので、先生や友達に助けてもらいながら、楽しさを見つけて欲しいです。 ・chromebookはうまく使うことができれば学習も楽しいし、学力があがることにもつながると思います。今後「ICT授業はわかりやすい」に肯定の回答をしなかった人や使いこなせない人が減るようになってほしいです。 ・中学の数学は、小学校の算数が基礎となっている部分が大きいのので、苦手とならない様、教えてほしい。 ・4年生国語の-0.2ポイントはどの部分で間違えが多かったのか、どうしてこのような結果になったのかを精査する必要がある。 ・5年生は2教科共平均を上回っており、2回目の調査結果も気になるところである。 ・アンケート「学校の勉強は楽しいか」について、楽しいと感じる児童がこれ程多くいることに驚いた。日頃より楽しい授業となるように工夫されている表れだと考える。 ・なぜ勉強をするべきなのかを考えさせる事も大切なのではと思う。 ・勉強が分からなくて不登校になる児童もいるとの事なので、何か1つでも得意な科目ができたり自信をつけてあげてほしい。 ・ICTについては、現社会において、必要なスキルとなってきているので、低学年のうちから触れさせる、慣れさせる事は、とても良いのではと考える。尚且つ、正しく使用できる様に教育してほしい。	・本校の研究の手立ての1つである、「教師の役割の明確化」を一層充実させる。そのことで、授業内の目標が達成できていない児童に積極的に声をかけることにつながる。 ・ICTの活用については、今後社会でも活用できることを前提に進んでいくだろう。そのことを踏まえ、校内でも学年の発達段階に応じて、積極的な活用を推進していく。一方で、ネットトラブル等にあわないための情報活用能力の向上を図っていく。 ・ICT活用の日常化が進む中で、デジタル入力と手書きによる「記述」のそれぞれの特性を活かした、効果的な使い分けを考慮していきたい。特に、思考の整理や学習の振り返りにおける記述活動を継続的に取り入れ、書くことを通じて思考を深める力の育成に努めていく。 ・国語科においても、鈴鹿市内での共通取組「よむyomuワークシート」の活用や三重県から配付されている「学Vivaセット」等を活用して、数値の向上を図っていく。 ・図書担当や図書委員会による創造的な企画を充実させ、児童が主体的に本を手取る機会を創出したい。各学年の実態に応じた「図書の時間」の活用や読み聞かせを継続し、良質な図書に触れる体験を通して、豊かな感性と語彙力を育む。
長期欠席対策	新たな不登校を生まない学校づくりのために、人権教育・生活指導・学力保障・児童支援のベクトルを合わせて取り組む。 →児童アンケート「先生は話を聞いてくれる」90%以上 →保護者アンケート「いじめのない学校づくり」100% →欠席日数30日以上の不登校児童数の減少	▲保護者アンケートより、「学校は、いじめのない楽しい学校づくりに努めている」の項目では、肯定的な回答が97％（7月）、98％（12月）であり、目標の数値を達成することができなかった。日頃から児童との対話を心がけ、問題が発生した際には迅速に管理職や生活指導主事、学年団で情報共有を行い、また、発生した問題について、保護者への連絡も密に行うようになってきたが、まだ不安を感じる児童・保護者がいるため、更なる対応策が必要である。 ○児童アンケートより、「先生は自分の話をよく聴いてくれたり、自分のことを認めてくれたりする」の項目では、2回の調査ともに肯定的な回答が95％であり、目標の数値を達成することができた。児童の「できた」や価値ある姿に出会ったら、その場面を逃さずに具体的な声掛けを行うことや、児童理解に努めることで、信頼関係を築いてきたことで、安心できる学校になっている。 ○昨年度と比べ、長期欠席者（国：30日以上）は34人（昨年度12月末日）→27人（今年度12月末日）、10日以上以上の欠席者も120人（昨年度12月末日）→95人（今年度12月末日）と、減少している。学校に登校しにくい、教室に入りにくい児童に対して、スクールカウンセラーのアセスメントやスクールソーシャルワーカーのアドバイスに基づき、個に応じた支援を行っている。さくらルームが児童にとって安心できる居場所になるように人的環境・物的環境を整えてきた。スクールライフサポータによる家へのお迎えや担任・コーディネーターの家庭訪問等で、学校との関係が途切れないようにした成果と考える。2週間に1回、校内コーディネーター会議を開き、教育支援課から不登校アドバイザーを招き、新たな不登校を生まないよう支援の見直しをしていることも有効であったと思われる。	・5年生頃に友達関係の変化があるように感じます。頻繁にスマホでのつながりがあり、今までの友達関係とは違っている。 ・安全のため、携帯電話をもたせるのは理解できるが、校内で使用、保管場所などあるのでしょうか？ ・長期欠席者が昨年度と比べ、減少していて、このまま来年度も継続していければ、さらに減少することが期待できる。 ・ただ、目標として保護者アンケート100%で児童アンケート90%以上なのは、少し疑問に思いました。学校に通うのは児童たちなので、児童アンケートを100%目標にしないと、子より親の気持ち優先になってしまっているように感じました。 ・「学校はいじめのない楽しい学校づくりに努めている」について。肯定的な回答が97～98%であるため、目標の100%を達成していないが、先生は日頃から児童との対話を心がけるなど、十分に取り組んでいると思います。 ・子どもたちの多くが「先生は自分の話をよく聞いてくれたり、認めてくれたりする」と思っていることは素晴らしいと思います。日々の先生方の取組の賜物だと思いますので、今後も続けていただきたいです。 ・不登校問題に学校は真剣に取り組んでいると思います。不登校児童への対応が、教師にとって過剰な負担とならないようにサポートできる人員を確保してほしい。 ・「いじめのない楽しい学校づくりに努めている」に対し、肯定的な回答が多いのは、学校内で問題を共有し、迅速に対応して頂けている成果だと思います。先生が小さな芽でも摘んで対応されているのを見たこともあるので、いじめのない学校づくりにつながっていると感じます。 ・長期欠席者が減少しているのはよかったです。新たな不登校を生まないようにしつつ、不登校になってしまった児童に対して、様々な働きかけをされており、効果が上がっていると思います。 ・子ども同士で起こったトラブル等に関して真摯に向き合い、保護者にもすぐ連絡し、すばやく組織的に対応していると感じる。 ・保護者の中で10名程度が否定的な回答とあるので、不安を取り除く対策が急がれる。 ・児童アンケート「先生は自分の話をよく聴いてくれたり、認めてくれたりする」95%は、自分の思いを聞いてくれたり、認めてもらえた事が自己肯定感アップにもつながっていくと思う。 ・不登校児童の減少に関して、カウンセラー等と綿密な連携をし、きめ細やかな対応を組織的にされた結果であると思う。来年度も継続し、更に減少することを期待する。	・不登校傾向の児童の個々のニーズに合わせて、対応を考えていきたい。また、現在の取組を継続していく。必要に応じて関係機関につないだり、環境を整備したりしながら、現在の支援や対応を継続していく。 ・学校に登校しにくい、教室に入りにくい児童に対しては、本人の気持ちを尊重しながら、少しずつ周りとなっていく。スモールステップでできることを増やし、自己肯定感を高めていく。また、児童の実態を把握し、気になるようなことがあれば、早期に対応することを心がける。 ・児童一人ひとりの心に寄り添う丁寧な対話を通じ、心理的安全性に基づいた強固な信頼関係を構築していきたい。また、小さな成功体験や望ましい行動（価値ある姿）を捉えた具体的な称賛を徹底することで、児童が自己肯定感を高め、安心して学校生活を享受できる基盤づくりに努めていく。

非認知能力育成		「非認知能力を高める年間計画」の一覧表を作成し、三委員会・各学年・各委員会活動で見通しをもって取り組む。「自己肯定感」を重点取組とする。→鈴鹿市版非認知能力アンケートで鈴鹿市の目標値以上	▲否定的は回答率を比べると、自己肯定感13.45%（鈴鹿市の目標値：10%未満）、社会性2.76%（1.8%未満）と、目標を達成することができなかった。 ○否定的は回答率を比べると、やりぬく力5.52%（10%未満）、自制心8.28%（10%未満）と、目標を達成することができた。 ▲社会性に関する項目では、否定的な回答が昨年度と比べ、0.22%増加した。教師が価値づけて認める方法が、効果的でなかったり、集団で認め合えたりする機会や家庭への啓発がもっと必要なのではないかと考えられる。 ○昨年度と比べ、やりぬく力（-3.90%）、自制心（-4.04%）、自己肯定感（-3.58%）の否定的な回答率が下がった。特に、掃除や係活動など、自分の与えられた仕事をやりぬくことができることにに対する肯定的回答率が高かった。児童のやりぬく力を価値づけすることや、家庭学習強化週間や自主学習の日を全校で設定して取り組んだことなどがやりぬく力、自制心の向上につながったと考える。	・自己肯定感や社会性に関しては、学校だけでなく、家庭との連携がもっと必要に感じる。親の立場からすると、やはり「できたこと」よりも「できていないこと」に目がいきがちで、つい厳しく言ってしまう。せつかく学校で、先生方が褒めてくれても、一番認めてほしい親に否定されては意味がないので、家庭でも同じ方向を向いていけるよう啓発した方がよいと思います。 ・回答率について。昨年度と比べるだけでなく、数年間の傾向(入学時からの変化等)を見比べるとどうですか？ ・自己肯定感が低い児童が多いのが気になりました。これは、すぐに効果が表れるものではないと思いますので、引き続き学校と家庭との両方で取り組むことが大切だと思います。小さなことでも、褒めてあげる、認めてあげることが大事だと思います。 ・非認知能力を高める方法がよくわからない中で、できる限り多くの体験を通して、身に付けて欲しいと思う。 ・地域の活躍できる場面が最も多くあるのではないかと思うのは、この分野である。 ・家庭や地域への啓発をすすめるのは良い案だと思う。 ・短時間で効果を出すのは難しい問題で、長期的に継続して取り組む事が効果につながると思います。 ・家庭においても、非認知能力について理解し、高めていく意識を持つことが必要だと感じました。 ・各項目の細かい分類分けのグラフを見ると、前年度の否定的な割合より、本年度の否定的な割合はかなり減っている。一年間の取組の成果の表れだと思う。 ・社会性に関しては、子どもによっては、大人が価値観を植え付けてくると感じる事もあるようなので、子ども自身の考えも認めた上で、話し合う事も大切だと思うので、tetoruでパンフレット等を定期的に送信したりして、啓発活動(広報活動)を更に行うこともいいのではと思う。	・自制心や、やりぬく力の育成をめざして、今後も家庭学習強化週間や自主学習の日の設定を行っていく。 ・自己肯定感を高める手立てとして、以下の6つの取組を進め、教師が意識していく。 ①努力したプロセスをほめる。 ②児童の行動をよく見つめ、具体的にほめる。 ③自己肯定感を高められるような取組を行う。 ④～してくれて「ありがとう」の声かけをする。 ⑤成功体験を増やす。 ⑥よいところ、得意なところをさらに伸ばせる手立てを考える。 ・社会性を育むために子どものよい言動を教師が評価づけし、意識を高めることで、よい言動を増やしていく。 ・1学期にも学校独自でアンケートを行い、個々の状況を把握して具体的な対応につなげる。
地域連携	地域への愛着心を育むため、地域の教材と人材を積極的に活用する。 →保護者アンケート「地域と触れ合う学習の実施」90%以上 →全国学力学習状況調査の児童質問紙「人の役に立つ人間になりたい」「地域や社会をよくするために何かしてみたい」平均以上	▲全国平均と比べ、全国学力学習状況調査の児童質問紙「人の役に立つ人間になりたい」-4.4ポイント、「地域や社会をよくするために何かしてみたい」-0.3ポイントとなった。「人の役に立つ人間になりたい」の項目が全国平均より低いのは、自己肯定感・自己有用感が揺らいでいる可能性があると考ええる。また、「地域や社会のために何かしたい」については、社会に貢献する意欲がないわけではないが、今の自分に何ができるかわからない（自信がない）ことが推測される。 ○保護者アンケートより、「学校は、地域と触れ合う学習を積極的に取り入れている」の項目では、肯定的な回答が、96%（7月）、97%（12月）であり、目標の数値を達成することができた。 ○【1年】生活科で校区の公園へ探検に出かけた。黒鍬公園では、地域の見守りボランティアである中森さんに、公園に咲く花の紹介をしていただき、花を育ててくださっている地域の方の思いに気づくことができた。各公園の特色や地域の人が、整備してくれることのありがたさを学んだ。 ○【2年】生活科「町探検」の学習で、校区にあるウエルシア、玉屋製麺所、ボナーレ、橋爪動物病院に伺った。働いている人の思いや願いを聞いたり、いろいろなところで自分（児童）たちや地域と関わりがあることを知った。特に「玉屋製麺所」の麺が給食に使われていることを知り、給食で麺を使ったメニューがでるたびに、喜んで食べるようになった。 ○【3年】社会科で、校区を東西南北に分けて、校区探検を行い、住んでいる町の土地の使われ方や人々の生活について考えることができた。また、玉垣消防団の方々に来ていただき、日頃は自分の仕事をしながら、地域で災害が起こった時に出勤することや、消防団のやりがいについて話を聞くことができた。さらに、消火等の体験もできた。その他に、ドン・キホーテの見学にも行った。お客さんに商品を買ってもらう工夫、買い物をしやすくする工夫について学ぶことができた。3学期には、中森さんに桜島地区の歴史に関する場所を案内していただいたり、昔の道具を紹介していただいたり、AGF工場見学にいく予定である。 ○【4年】社会見学で、桜島地区から始まったヨシザワに行ったり、地元企業のAGFの出前授業を受けた。 ▲【5年】総合学習で、防災について学習したが、桜島地区の自主防災の学習につなげることができなかった。 ○【6年】ボランティア、子どもを守る家など、地域の方々に支えられてきたことを知り、感謝の気持ちを伝える取組を行う予定。 ○学習ボランティアとして、読み聞かせや学習の補助で多くの支援をいただくことができた。	・地域の皆様のご協力に感謝でき、良かったと思う。 ・中・高学年の生徒から、低学年に伝えられていくと身近な方からの応援だと理解出来たら良いのですが…？ ・地域と触れ合う学習はとてもよい取組だと思う。 ・こども町探検に出かけると、「この前、ここに行ったよ！」と道を通るたびに教えてくれます。 ・5年生の自主防災の学習につなげることができなかったのはなぜでしょうか？単に授業の時間がとれなかったのか、こどもたちの意欲がなかったのか…？どちらにせよ、三重は南海トラフ大地震が起こると言われているので、こどもたちにも防災の意識を高めてもらえるような学習ができると良いと思います。 ・児童が地域と触れ合い、地域と関わりがあることなどを理解することは、必要な取組であると思うので、引き続き、取り入れていただきたい。 ・各学年それぞれが、地域に関する授業を取り入れるのは、いいことだと思いますので、続けて欲しいと思います。 ・長い間、ボランティア活動を続けてきましたが、子どもたちも顔を覚えてくれていて、学校外でも挨拶をしてくれて嬉しく思います。 ・地域との連携に各学年で積極的に取り組んでいることがわかる。こうした学習により、地域に対する愛着が生まれ、心の拠り所となるのだと思うと、今後も継続してほしい。 ・各学年で地域学習を取り入れられており、地域への理解が深まったと思われます。 ・登下校時は見守りをして頂いている姿をお見かけする事も多く、地域の方々のご協力を感じます。 ・アンケート「学校は、地域と触れ合う学習を積極的に取り入れている」では、各学年(年齢、発達段階)に合わせて、地域との交流が有意義に行われていると感じる。 ・この様な取組の中で、地域を支える人々の考えや思いを感じて、自分は何をしたいか、何が出来るかを考える児童が増えればと願っている。 ・中学で行う職業体験のようなものを取り入れる事もいいのではと思う。	・来年度も継続して、地域の方や地域の公園についてよく知り、自分ができることについて考えさせていきたい。 ・町探検で町の様子だけでなく、働く人との関わりがあったことで、大人になった時に自分は何をしているのか思い浮かべながら、様々な職業に興味をもつことができていた。来年度も継続して、地域の方との関わりを持つとともに、新たに働く人の思いや願いを掲示するなどして、日常生活でも振り返られるようにしていきたい。 ・これまでお世話になった人々やお世話になったことを振り返り、今度は自分たちがどんなことができるのかを考えたり、どのように感謝を伝えるか考えることができた。 ・登下校時における見守りを、地域の方に協力いただいている。見守りの方々との日常的な挨拶や交流は、児童に「地域の一員として大切にされている」という実感を与え、安心感や自己肯定感の醸成に大きく寄与していると考ええる。今後も、児童の安全確保と健やかな成長を支える見守りの継続をお願いしていく。	
学校における働き方改革	学年担任・担当・管理職への報告と相談を確実にし、迅速かつ適切に対応ができる組織体制を整える。 三委員会・学年部でサポートすることで、若手教員の育成と校務の平準化を推進する。 →年360時間を超える時間外労働者数0人	○報告・連絡・相談を密に行うことで、発生した課題に対し、スピード感を持って組織的に対応することができた。 ○チーム桜島小として、経験年数の浅い若手教員を支援しながら、育成することはできた。 ▲12月末で既に、5名の職員の時間外労働が年360時間を超えてしまった。校務の平準化を適切に進める必要がある。	・5名の方に傾向はないのか？3年未満の先生が多いとか、学年主任など、他の先生方より仕事が多いなど、傾向があれば、対策も取りやすい。 ・下校後のトラブルに関しては、学校は干渉しないなどの手紙を出すのはどうか？ ・特定の先生に校務が集中しないように、できる限り平準化を推進していただきたい。 ・学校の先生方は、本当にお忙しいそうなので、皆さん、すごく子どもたちの為に頑張っているんじゃないかと思います。先生方自身が心も身体も元気でいて欲しいと思います。 ・先生方が無理なく働ける環境になるように、行政も手を尽くして欲しい。 ・組織的に対応されていると思います。保護者側も現状を理解し、協力する姿勢が必要だと感じます。 ・若手の先生がやりがいを感じながら働けるように今後もOJT等の手厚い支援をお願いしたい。	・報告、連絡、相談を密に行い、情報共有を適切に行い、児童の見守りと指導体制を築く。 ・一部の教職員に業務が偏らないように、校務分掌を振り分けているが、学期初め、終わり、行事前など、勤務時間外労働が多くなる傾向にあり、継続して校務の平準化に努める必要がある。 ・若手教職員に対しては、市教委が実施する5年以下研修で授業改善を中心に指導、支援してもらっている。また、困っている職員に対し、学年を超えてサポートする気風があり、一人で業務などを抱え込まないような雰囲気を作り出していく。	